

同志社大学にとっての希望

奨励	村田 晃嗣〔むらた・こうじ〕
奨励者紹介	同志社大学長 同志社大学法学部教授
研究テーマ	戦後アメリカ外交、日米同盟関係

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。

(ローマの信徒への手紙 5章3—4節)

希望とは何か

同志社大学長の村田でございます。京都でも桜があらかた散ってしまいましたけれど、この数週間、私どもは1年のうちで最も美しいシーズンを過ごしてまいりました。そして私ども同志社大学にとっては、4月1日に6000人からなる新入生をお迎えしたところでもあります。そして、キリスト教に関心をもつものにとっても、来るべき日曜日がイースターです。同志社大学にとってもキリスト教に関心をもつものにとっても、若者を教育し、真理を探究する大学という組織にとっても、「希望」という言葉が最も適当な時期ではなからうかと思えます。先ほど朗読していただきました聖書の箇所も希望について語ったものです。

さてそれでは、果たして希望とは何なのでありましょうか。「若者は夢と希望をもって」とか「希望を語れるようにせよ」と大人たちは説きます。しかし、若者たちにそのように説く大人たちは、希望とは何かを知っているのでしょうか。果たして希望とは何でありましょうか。これは難しい問いであります。

村上龍という小説家があります。皆さんのなかにも愛読者だという方がおられると思います。彼が著した『希望の国のエクソダス』（文藝春秋 2000年）という小説がございます。これは日本社会に絶望してしまつた中学生たちが、この国を捨てて大量に海外にエクソダス、脱出してしまつたという小説であります。つまり、旧約聖書そのものの物語です。この小説のなかで、主人公の中学生が語る有名な言葉があります。「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」。この国には希望だけがない、と主人公の中学生は申します。1990年代に書かれた小説ですが、客観的に見ますと日本を取り巻く事態はさらに厳しくなっています。1990年代の日本経済はまだかなりの活力をもっていました。今やGDPの規模でも中国に抜かれ、長年享受してきた世界第2位の経済大国の地位を失い、早晩はインドやロシアにも抜かれて、2030年代に入るところには日本の経済的地位は世界第5位程度に落ちているだろうとみられます。さらに厳しいことは、少子高齢化という事態であつて、今日の新聞にもすでに人口統計上、日本の人口は4人に1人が65歳以上の高齢者からなつており、このまま推移するならば、2100年ごろの人口は5000万人そこそこ減つていて、非常に厳しい深刻な少子高齢化が進行している、とあります。村上龍がこの『希望の国のエクソダス』というシニカルな小説を書いたときより、この国を取り巻く客観情勢はさらに厳しくなつて、希望をもつことはなかなか難しい状況になるのではないかと気がするのです。そして、希望とは何かという問いが依然として残るわけでもあります。

もちろん、私のように学の浅い人間が、限られた時間に希望とは何かを皆さんに繰々お話しすることはとてもできません。そこで、碩学の議論を借りながら少しリフレーズする形でご紹介したいと思います。ドイツ出身の心理学者でアメリカに亡命したエーリッヒ・フロムという人がいます。フロムの弟子の一人でありました。このエーリッヒ・フロムが希望についていくつかの書物を著しています。フロムの議論を借りながら、希望とは何かということについてお話をしたいと思います。

希望とは何でないのか

「希望とは何か」ということを肯定的な形で定義するよりも、「希望とは何でないのか」という形でお話をしたいと思います。第一に、希望は欲望ではありません。金持ちになりたいとか、異性にもてたいとか、有名になりたいというのは希望ではありません。それはむき出しの欲望です。希望は決して欲望ではありません。そして、希望は願望でもありません。できもしないことを夢みている願望と希望は異なるのであります。そして、希望は待望ではありません。ただ単に待っているだけのものとは希望とは異なるのであります。希望は欲望ではなく、願望ではなく、そして待望ではないのであります。このように考えると、希望というもののイメージがある程度浮かび上がってくるのではないかと思います。

まず、希望が欲望ではないということは、希望は自分が有名になりたい、自分がリッチになりたい、自分が偉くなりたいたいという、自分が、自分がというものを越えたいところに希望がある、ということです。希望にはある種の「公共性」というものがなければ成立しないと思えます。自分さえよければ、同志社大学さえよくなればいんだ、という考え方の先には決して希望はない。この地域をよくしたい、日本の私立大学をよくしたい、日本を含むアジアをよくしたいとか、自分を越えた公共性に対する問いかけがなければ、希望というものは成立しない。これが第1点目です。

そして2点目は、希望は決して願望ではありませんから、同志社大学が日本一の大学になりたい、世界一の大学になりたい、水曜日にチャペル・アワーを開いたら何百人もの学生や若者が来てくれるような同志社大学にしたい、同志社大学のすべての授業は20人くらいの少人数クラスにしたい。そして学生たちが1時間目でも遅刻せずに必ず全員出席しているような、そんな大学にしたい。これらは大変結構なことだけれども、おそらく実現はしない。それは夢のような話であつて願望の域を超えない。つまり、実現可能性が伴っていないければ、できもしないことを語っているだけでは希望にはならない、ということだろうと思えます。

そして3点目は、希望は待望ではないということです。日本経済が苦しい、日本を取り巻く客観情勢は厳しい。しかし、じつと我慢して耐え忍んでいけば、いつか必ず再び春がやってきて花が咲くだろう。日本の景気もいつか回復して日本社会の活力を取り戻して、我々の会社も組織も売上が上がっていくに違いない。今は厳しいけれども、じつと耐えて待つていよう、と他人事のように待つていただけでは希望はやってこない。希望には当事者意識が必要だということです。

同志社大学にとっての希望

希望を構成するものは、三つの要素からなつていて、一つは公共性であり、もう一つは現実に対する感覚であり、三つ目に主体性・自主性ということだろうと思えます。この三つの要件のどれか一つでも欠ければ希望というものは成立しないのではないかと。このように考えたとき、同志社大学にとっての希望とはどういふものになるのでしょうか。

まず、公共性をもたなければなりません。同志社が一番になればいいんだ、同志社の受験生さえ増えればいいんだ、同志社の収益さえ上がればいいんだ、同志社の留学生さえ増えれば、それでいいんだ、と同志社のことだけ考えている希望は生まれません。そのことによって日本の社会をこのように変えていきたい、日本の私立学校はこうあるべきだ、キリスト教主義の学校はこのようにあるべきだ、という同志社の利益を超えた公共性を追求しなければ、同志社大学に希望が訪れることはないと思えます。

それから2点目に、現実性がなければなりません。2万8000人からなる同志社大学、1000人の教職員が働く同志社大学、年間400億円ほどの予算でこの大学は運営されています。同志社大学には多くの可能性があるが、同時に限られたリソースでこの組織は運営されているわけであつて、その現実を前提にした議論でなければ、それは夢物語になつてしまふ。現実に対するしたたかな計算、戦略がなければ希望を語ることはできないでしょう。

そして3点目に、2万8000人の同志社大学の学生一人ひとり、1000人の教職員、それ以外に同志社大学に連なる多くの人たち、卒業された校友、父母の方々、あるいは学校法人同志社内の他の学校で働き、学が方々、同志社大学に直接・間接につながる多くの方々、自分たちが同志社の一員である、構成要員であるという主体性をもたなければ、同志社大学が希望というものをもちつていけないだろうと思つておられます。そういう公共性と現実性、当事者意識をもって同志社大学の希望を一人ひとりが考え、語つていかなければならないと思えます。

そして、もう一つ希望について大事だと思うことですが、「潜水服は蝶の夢を見る」という映画が10年ほど前にありました。社会的に大変成功している雑誌の編集者が突然病気で全身麻痺になり、意識はしっかりしているが、身体の動きをすべて失つてしまつて、瞬きしかできない寝たきりの状況に陥るといふ、実話に基づいた映画です。この主人公は希望の対極、絶望に陥つてしまふのですが、そのなかでやがて希望を見いだします。彼にできることは瞬きだけでありました。彼は瞬きで伝記を書き始めます。1回のウィングはa、2回はb、3回はcと、そのようにしてアルファベットを一文字ずつ表現しながら、同伴者を得て、長い長い伝記を記していく。そのなかに自分の生きている意味を見いだしていくといふ実話に基づいた映画でした。この映画のなかに、大変印象的なセリフがありました。彼は寝たきりでいて話すこともできないが、しかし「孤独ではない」と瞬きを通じて語ります。「なぜならば人間には記憶がある。そして人間には想像力がある。人間が記憶をもち、想像力をもっている限り、記憶を通じて人間は過去とつながることができる、想像力を通じて未来とつながることができる。今、自分がどんな状況になつても自分は過去と未来とつながっているから孤独ではない」と主人公は語るのです。希望をしっかりとつめていく、しかも客観的に難しい情勢のなかで希望をしっかりとつめていくためにも、「記憶」として「想像力」が不可欠であろうと思えます。

創立150年に向けて

今年、同志社の創立者・新島襄が命懸けで函館から海を渡つて150年を迎えようとしています。やがて来るべき2025年には同志社は創立150年を迎えます。今年で同志社は創立139年目です。日本の数ある私立大学のなかでも最も長い歴史をもつ大学の一つであります。つまり、我々には多くの記憶が蓄積されているのであります。昨年NHKの「八重の桜」で創立期の同志社が描かれて、多くの人が知るところになりました。しかし、必ずしも139年の同志社の歴史は素晴らしいことだけではなかつた。多くの挫折もあり、失敗も重ねています。同志社の過去における多くの成功と多くの人たちの努力と、そして失敗と挫折、その過去をしっかりと記憶していくことが、我々が同志社人として希望をもつていく上で大事なことでなからうかと思えます。そして、創立150年の2025年、新島襄は大学は200年経たないと大計は形をなさないと言つたとされますが、同志社が創立200年を迎えたとき、この京都の地にあってどんな大学であるべきなのか、記憶と想像力の両方をもたなければ厳しい環境のなかで、公共性と現実的な感覚と主体性をもたなければ、希望を維持し続けていくことは難しいのではないかとと思えます。そういう意味で、我々は大いに同志社の歴史、過去を振り返りながら、節目、節目の同志社がどうあるべきかを考えてい

きたいと思います。

今申しあげたように、2025年には同志社は創立150年を迎えます。私は学長として、同志社大学が2025年にどうあるべきか、そのときに同志社大学のグローバル化はどのように進展していくべきなのか、同志社の研究の体制がどのように整っているべきなのか、同志社大学にとってキリスト教や良心教育がどのような形で結びついているのか、さまざまな観点から「同志社大学ビジョン2025」を、学内外の多くの方々のご意見をいただきながら、ぜひ、とりまとめたいと考えているところでございます。当面は2025年の創立150年に向けて、あと11年、一步一步、希望をもって進んでいけるように、まずは公共性をもつ。自分の身の回りのこと、自分の大学のこと、自分の家庭のことを超えて社会や文化について考える広い視点をもつ。同時に客観的な情勢、我々がもっているリソースや問題点をしたたかに分析する現実的な関心、我々一人ひとりが同志社につながっている枝だという主体性をもちながら、「同志社大学の希望」について考えていかなければならないと思っています。

そのように同志社大学の希望を考え、語っていく上で何よりも大切なことは、このキャンパスのなかで祈りがあるということだろうと思います。入学式にも、新入生の方々にいくつかお願いをしたことの最後に、「ぜひ祈りに触れて祈ってほしい」と申しあげました。それはキリスト教の祈りでなくても構わない。あるいは言葉にならなくても構わない。しかし、どんなに優れた科学者でも、どんなに優秀なスポーツ選手でも、最後には祈るのであります。人は祈るのです。人だけが祈る生き物であって、祈るということは我々が人であることの証明でもあらうと思います。同志社大学からどれだけ多くの司法試験の合格者を出しても、どれだけ多くの公認会計士の合格者を出しても、どれだけ多くの国家試験の合格者を出しても、同志社大学からノーベル賞を取るような学者が生まれ、同志社大学に多くの留学生がやってきても、このキャンパスから祈りがなくなれば、同志社は同志社でなくなってしまうでしょう。このキャンパスのなかで声にならなくても、形にならなくても、それぞれの人が自分の持ち場で祈り続ける。そのなかで公共性と現実的な感覚と主体性をもちながら希望が語られる、そういう同志社でありたいと思います。

2014年4月16日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録